

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成22年4月20日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

京 都 大 学 総 長
松 本 紘

事業区分	平成21年度・大学全体計画事業助成		
事業名	京都大学フォーラム及び地域講演会		
成果の概要	「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	5,451,565 円	
	うち当財団からの助成額	5,400,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	京都大学 大学運営費
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会議費	3,019,972	3,019,972
	印刷費	409,500	409,500
	通信運搬費	192,198	141,918
	旅費	1,456,880	1,456,880
	謝金	156,260	156,260
消耗品費	216,755	215,470	
合 計	5,451,565	5,400,000	

成 果 の 概 要

京都大学総長 松本 紘

1. 東京フォーラム

京都大学は、創立以来112年間、自由の学風のもと闊達な対話を重視し、誇りと文化に満ちた歴史都市・京都の地において自主自立の精神を涵養し、高い倫理性を備えた独創的な研究活動や卓越した知の継承と創造的精神の涵養に努め、学部・大学院合わせて延べ二十五万人以上にのぼる多くの有能な人材を輩出してきました。

なかでも、我が国で初めてノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士をはじめ、五人のノーベル賞受賞者を卒業生として輩出したことに加え、平成20年10月7日には元基礎物理学研究所長の益川敏英名誉教授と、同名誉教授と京都大学で共同研究した小林誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授がノーベル賞を受賞したことは、京都大学の卓越した教育研究の成果であると言えるものです。

今日、我が国は、グローバル化が進む国際社会の中で、複雑化・高度化した様々な課題に直面しており、「知の拠点」としての大学に対する期待は、これまで以上に大きくなっております。特に、大学の果たすべき機能として、教育・研究と並んで社会への貢献も重要なものと認識されており、高等教育段階における地域社会・産業界との連携が、社会の要請を的確に反映し、多様性と質を高めながら一層推進されることにより、これからの知識基盤社会を支える高度で有為な人材を育成していくことが求められております。

このような中で京都大学は、行政や経済の中心である東京において、「宇宙船地球号の未来を考える - 京都からの発信 - 」をテーマとし、限りある資源の下で、資源・環境問題についての悲観論や楽観論を超えて、文理にまたがる京都大学の新進気鋭の研究者の報告を素材に、知識や技術及び文化の視点から、今後の生き方について参加者と一緒に考える機会とするべく、平成21年12月9日（水）に東京フォーラムを開催しました。

フォーラムは、松本 紘 総長の挨拶で開幕し、次いで第一部において、勝見 武 地球環境学堂教授が「都市の未来」、安部 浩 人間・環境学研究科准教授が「マニュアルなき操縦」、浅利美鈴 環境保全センター助教が「ごみは意外に雄弁だ」と題して、それぞれ講演を行いました。次に、第二部では浅野耕太人間・環境学研究科教授がコーディネーターを務め、講演者3名とパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッシ

ョンでは会場から寄せられた質問票にパネリストが回答する方法で進められ、活発な議論が行われました。その後、京都大学における取り組み紹介として、小林慎太郎 地球環境学堂長が文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム「環境コミュニケーション・リテラシーの向上 プロジェクト型インターン研修によるミニ・プロジェクトワークの組織的展開」」について、塩路昌宏 エネルギー科学研究科教授（環境安全保健機構 環境・エネルギー管理推進室長）が京都大学における環境・エネルギー管理の取り組みについて紹介いたしました。

今回の東京フォーラムには、企業をはじめ、大学、学術団体、文部科学省等の関係省庁など各方面から約120名の参加があり、本学の最新の学術研究活動を紹介するとともに、資源・環境問題への取り組みについても紹介することにより、産業界や行政関係者に対して理解と協力を求め、本学の社会との連携活動の一層の推進を図ることができ、所期の目的を達成することができたと考えています。

引き続き、本学の教育研究面での様々な活動や学術研究成果を積極的に向けて発信し、連携を推進するため、本フォーラムを継続して開催したいと考えています。

2 . 地域講演会

（総評）

「京都大学地域講演会は」は、「京都大学教育研究振興財団」の後援を得て、京都大学が伝統的に蓄積して来た高度な学術や知的財産に加え、現在進行している教育・研究活動や新たな研究成果を全国の各地域に出向き紹介することを通じて、広く社会に還元するために開催したものです。

岐阜講演会では、メインテーマを「幹細胞と化学の融合が生み出す新しい世界」と題し、現在話題となっている幹細胞(ES細胞/iPS細胞)について物質 - 細胞統合システム拠点(iCeMS)の中辻憲夫拠点長、北川進副拠点長、上杉志成教授の講演を行いました。地元高校生も多数参加し、最新の研究に直に触れることができたため、化学について興味を持つようになったとの声が数多く聞かれました。参加者は地元マスコミの宣伝効果もあり総勢137名で、盛況のうちに閉会しました。

福岡講演会では、今年2009年がガリレオが初めて望遠鏡を夜空に向けてから400年とい

う世界天文年にちなんで、宇宙をテーマに小山勝二京都大学名誉教授、京都大学宇宙総合学研究ユニットの磯部洋明特定助教の講演を行いました。迫力ある太陽の映像など、私たちの想像を超えた宇宙の世界を図や写真を多く用いて一般の方にも分かりやすい講演が行われました。参加者は地元マスコミの宣伝効果もあり総勢192名で、盛況のうちに閉会しました。

(今後の計画)

教育・研究活動を通じた社会との連携協力を一層進める効果が期待できるため、平成22年度以降について、更に内容を充実させていきたいと考えています。